アッセンブルできたカドックくん

雪風冬人　弐式

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、アベンジャーズが実在する世界であったら？

もし、カドックがアベンジャーズに拾われたら？

的なクロスオーバーを考えたので、カドックくんを活躍させたくて書きました。

ガバガバ設定などなどＯＫな方はどうぞ！

目次

プロローグ「ミッション・スタート」――――1
第一話「戦え！カドックくん!!」――――4
第二話「生き残り」――――8
第三話「アッセンブル」――――12

プロローグ「ミッション・スタート」

遥かな昔、誰かが言っていた。

『腐りかけの星に、まだ侵略される価値はあるのか』と。

その言葉通り、この惑星に降り立った侵略者が狙ったのはこの星に隠されていた資源と二つの神秘の石だった。

だがそれでも、侵略者を魔の手から地球を守り抜いたヒーロー達がいる。

彼等の名は、アベンジャーズ。

大いなる力に伴った、大いなる責任を果たすため、戦い続ける者達のチームである。

そして、この僕、カドック・バードンもその一員である。

〈カドック様、任務と関係ないレポートは控えるべきでは？〉

「そうかい？トニーさんやピーター辺りなら、堅苦しいのはゴメンだ、って言いそうだけど」

〈あのお二方を引き合いに出されると少々……〉

「分かったよ、ジャービス」

僕と、僕のかけているメガネから声を発するトニーさん製作のサポートＡＩ『ジャービスⅡ』がいるのは、国連公認の人理継続保障機関カルデアだ。

何でも人類の絶滅を回避する目的で設立された機関らしいが、その設立の経緯や資金源、インフィニティ・ストーン由来とは違うオカルトの気配等々、叩けば叩くほどホコリが舞い上がるので、不審に思った国連の職員がアベンジャーズへと調査を依頼したのだった。

そこで、師匠や義父さん、キャプテン、それにトニーさんといった錚々たる面々にこの組織へ潜入する任務を、アガモットの眼を師匠の次に使い熟せた僕に白羽の矢が立ったわけだ。

アベンジャーズの面々は、スパイダーマンたるピーターを除けば顔が割れているし、ピーター自身もまだ学生だ。

僕はトニーさんやバナー博士、ピム博士に色々教わって、飛び級で大学を出ているから学業には問題ないしな。

それに、カルデアの場所が場所だけに師匠と同じ魔法が使える僕なら、距離なんてあってないようなものなのも理由だろう。
〈カドック様。そろそろお時間です。レイシフト前のミーティングが、始まります〉
「了解」
人類の絶滅する原因たる特異点の場所へ行くためには、レイシフトという方法でタイムトラベルする必要がある。
そして、そのレイシフトには適正があり、何の因果か俺はその適正が高く最も前線に立つＡチーム所属となってしまった。
まあ、元々一般枠で募集していた候補生で応募したらレイシフトの適正の高さ故にＡチームとなってしまったわけだが。
ミーティングでは、４８人目の最後の候補者が所長の目の前で居眠りをするという勇気ある行いをして、ファーストミッションから外されるという珍事が起こったが、現実は非情にも流れていく。
後で、顔を拝んでおこうかな。
ようやく、レイシフトの準備が整ってコフィンに入った時、ソレは起きた。
〈警告！熱反応を感知！データに無い術式を検知！爆発すると予測します！〉
「マジか!?ジャービス、お前はカルデアのシステムに移れ！」
〈了解しました。カドック様も脱出を！〉
ジャービスの警告から、持ち込んだ装備で常に身に着けているパンサースーツを展開。
ヴィブラニウムが織り込まれた黒豹をモチーフにしたスーツは、ワカンダのティ・チャラ陛下から餞別として贈られた物だ。
鋭利な爪で、コフィンをこじ開けて外に出た瞬間、あちこちで爆発が起きる。
衝撃を吸収してくれるスーツだが、爆風までは吸収されずにあちこち転がり回る。
起き上がって視界に入ったのは、燃え上がるような真っ赤になった地球儀、アルデアスだった。

「ジャービス!!状況は!?」
〈システ……、損傷あ…。レ…シフ……、実行されま……。ひ……な、んを…〉
自分の聴覚がやられたのか、スピーカーが破損したのかジャービスの声が飛び飛びで上手く聞き取れない。
それでも、生存者を探して動こうとした時、今度はハッキリと聞こえた。
――システム、レイシフト、最終段階へと移行します。
――座標、西暦２００４年、１月３０日、日本。マスターは最終調整に入って下さい。
――観測スタッフに警告。
――カルデアスに変化が生じました。
――近未来１００年に亘り、人類の痕跡は発見できません。
――人類の生存を保障できません。
――レイシフト要員規定に達していません。
――該当マスターを検索中。
――発見しました。
――番号２をマスターとして再登録します。
――レイシフト開始まで。
――３。
――２。
――１。
――全行程クリア。ファーストオーダー実証を開始します。
「……うそーん」
無慈悲で冷たいアナウンスの内容に、顔が青褪めるのが分かる。
コフィン無しのレイシフトでは、身に着けている物しかできない。
せめて、これだけはと、トランクから金色のガントレットを取り出した瞬間、僕の意識はブラックアウトした。

第一話「戦え！カドックくん!!」

『速すぎて、見えなかった？』
――それが、僕の運命（Fate）の始まりだった。
『最後まで、とことん付き合うよ』
――その信念に、憧れた。
『これが、魔法さ』
――そして、自分は変わることが出来た。

「って、これって走馬灯じゃん!?」

懐かしい夢を見たと思ったら、死にそうになっていた。ヤベーイ！
「ジャービス。ジャービス！状況はどうなってる!?」
周囲を警戒しながら、通信を行うが返ってくるのはノイズだけ。
右腕の腕時計を数度叩くと、赤いメタリックなグローブへと形を変えて、立体映像が投影される。
しかし、こちらもコンソールやキーボードは映るがそれ以外には砂嵐の状態だ。
「ＧＰＳどころか、ネット回線もダメか。となると……」
あの時、咄嗟に掴んだ左手に嵌めた金色のガントレットに視線を落とす。
そこに刻まれた六つの真紅の紋様をなぞる。
「令呪起動（セット・オーダー）」
拳を握り締め、思い浮かべるのは、かつて迷い込んだＳＡＭＵＲＡＩが跋扈していた世界。そこで、絆を結んだ大切な頼もしい仲間にして家族。
「来い、――――!!」
真紅の紋様が輝くと同時に、足元に魔法陣が広がって一筋の光が空へと昇った。
「令呪受理（イエス）。我が主（マイロード）」
光が収まると、そこには片膝をついて恭しく頭を下げている仲間が

いた。
「どうぞ拙者に、主命をお与え下さい」
――――その少女は、一人見ず知らずの街の中を走っていた。
「なんで、私がこんな目に!?レフ！レフはいないの!?レフ、出てきてよォオ!!」
『所長！落ち着いて!!敵らしき反応は、付かず離れずで追ってきています』
涙を流し、恥も外見も殴り捨てて所長と呼ばれた少女は走り続ける。相手に遊ばれていると分かっていながらも、一秒でも長く生き残る為に。
「私が死んだら、誰がカルデアを！人理を！守るって言うのよぉおおお!!」
僅かな希望に賭けて、己の使命を全うする為に。
だがそれも、限界が訪れる。元より苦手な全力疾走、生命の危機という強度の緊張、予定通りに事が進まなかった焦りなど、少女は遂に足がもつれて転んでしまう。
「クスクス。残念デシタ。頑張ッタゴ褒美ニ、永遠ニ石像ニシテアゲル！」
今まで、少女にわざと追いつかないようにゆっくりと近付いていたフードを被った手に鎌を持った妖艶な女性が、灰色の髪を靡かせながら少女の前に姿を現した。
嗜虐的な笑みを浮かべながら、手に持った鎌を振り上げた。

無事に仲間を召喚でき、装備の確認も一通り済ませると移動を開始する。
仲間は既にこの街の情報収集をお願いして、別行動に移っている。
ウイングスーツかアイアンスーツがあれば、移動が楽になったのだがないものねだりをしても仕方ない。
〈この先、一キロほど行った右手のビルの影でござる。そこに、生存者らしき反応と〉

「かつての君たちと同じ、サーヴァントの反応か」
〈如何にも。生存者が襲われているでござるが、拙者は待機で宜しいので？〉
「ああ。この辺一帯の地形を把握するために、魔術で走査してから誰かが見てる。敵だったら、情報を吐かせて」
〈御意。主、ご武運を〉
襲われている生存者を目視できる距離までとなり、今まさに倒れている生存者に鎌が振り下ろされようとしている。
「せーのッ!!」
引っ掻き傷ような傷跡で一部の塗装が剥がれている、真ん中に星が描かれている円形の盾をフリスビーのように力一杯投げる。
同時に腰のベルトに取り付けていた二本指だけ通すメリケンサックのような形状のレリック、スリング・リングを使って生存者のすぐ後ろに飛ぶ。
ガアァァン!!と痺れるような金属音が、盾と鎌の刃にぶつかったことで響き渡る。
というか、生存者って所長じゃん。
「失礼しますよ、っと！」
「貴方は!?」
生存者こと所長を抱えて、ビルの影に隠すとすぐさま鎌を持ったサーヴァントの所に戻る。
所長が何か言っていたが、取込み中なので後にしてもらう。
おっかない女性のサーバントだが、見たところクラスはランサーだろうか。
こちらを睨んでくるが、気にせず右手の磁力の装置を起動して近くに落ちた盾を回収して構える。
「貴様ァ、ヨクモ私ノ楽シミヲ邪魔シタナ」
「プロフェッショナルとして、見過ごすわけにはいかないから、ね!!」
右手を翳してフラッシュを焚く。おまけとばかりに、普通の人間ならば思わず耳を塞いでしまう音波も流し続ける。
目を逸らした隙に地面を蹴って接近すると、盾の縁で頭を叩くと続

け様に身を捻って腹部に左肘を打ち込む。
鎌という武器の性質上、近付きすぎたら切れない為か距離を取ろうとして後ろに跳ぶサーヴァント。
「残念、トリックさ」
「ナ、ニィイ!?」
スリング・リングで盾で両腕を隠しながら、左手だけ魔術で作った剣を持ったまま転移させていた所へ自分から飛び込んでしまったので、胸から火花が散る剣が生えている。
「貴様、名ハ？」
「カドック・バートン。コードネームは、義父さんから受け継いだホークアイ。アベンジャーズの一員さ」
胸から引き抜いた魔術の剣を剣の状態から、紐に変えて縛り上げて拘束する。
「さて、知ってることを話してもらおうか？」
「ククク。精々、足掻ケ人間」
嘲笑しながらこちらを睨み付けてきたが、睨んだ瞬間にサーヴァントの体が硬直して倒れ、光の粒子となって消えた。
こっちをやけに視界に入れようと目を動かしていたから、魔眼の類かと思ってミラー・ディメンションを展開しておいて正解だったようだ。
こちらを観察するような視線もいつの間にか消えているから、彼女が上手くやってくれたのだろう。
しっかし、生存者がうら若き少女とはいえ、オリエンタル？オルガナイザー？オルガなんとか所長だけとは。
これは、先が思いやられるな。

第二話「生き残り」

ランサーらしき女性のサーヴァントを倒し、周囲の安全を確認すると、所長を隠したビルの影に移動する。
「ピィッ!!あ、貴方は、序列７位のカドック・バートンじゃない!?」
『所長、落ち着いて下さい』
自分の姿を見た瞬間ガタガタ震えて、まともな意志疎通が難しそうな所長のＩＤをどうしようか悩んでいると、何もない空間に映像が投影されて、そこにはサボりの常習犯たるロマニ・アーキマンの顔があった。
「おう、出たなサボり魔。ジャーヴィスはそっちにいるか？」
『ジャーヴィスって？それよｒ』
『カドック様、ご無事で何よりです。あの爆破の後、当初の予定通り特異点Ｆへとレイシフトを実行されました。本来はコフィンを介さずにレイシフトは成功率が低いのですが』
「師匠達も言っていたが、０％でなければ成功したのも同じさ」
『納得致しました。無事に特異点Ｆにレイシフトできたことから、そちらでその特異点発生の元凶を絶てば特異点は崩壊。カルデアに帰還できるかと』
「アベンジャーズ、もしくはフューリーさん達と連絡は？」
『申し訳ありません。今のところ、外部との通信は一切できておりません』
「そうか。仕方ない。これより、ホークアイは非常事態と判断し、アベンジャーズの理念に基づきミッションを開始する」
『承りました、カドック様。彼女達の出動は？』
「既にコードネーム、パライソに出動してもらっている。インフェルノやＫＥＮＧＯＵ達には、しばらくそちらの防衛を任せる。こちらが必要と判断したら、出動させる」
『流石、仕事が早いですね。では、私は……』
『ちょぉおおっと、待った!!』
「どうした、Ｍｒ．アーキマン？」

ジャーヴィスとのやり取りが終わろうとした頃、フリーズしていた医療部門のトップであるロマニ・アーキマンが通信に割り込んできた。
『取り敢えず、カドック君が無事で良かったよ！でも、アベンジャーズってあのアベンジャーズのことかい!?』
「その通り。コードネームはホークアイだ。以後、お見知り置きを」
『うわー！まさか、こんな極地までスーパーヒーローが来てくれるなんて！後でサイン貰っても？』
「事務所を通して、お願いします。同僚を失って失意のところだろうが、ジャーヴィスの補佐を頼む。カルデアに来たのは、人類を救うためだろう？亡くなった人達の分まで、その想いを無駄にしないためにやり遂げるぞ!!」
『はい!!』
ふむ。この反応を見る限り、カルデア側の生存者に爆破の犯人はいない感じか。
ちなみに所長は、アベンジャーズって何よ？ニューヨーク決戦？ソコヴィア協定？何よそれ？的な発言をして、Ｍｒ．アーキマンに絞られている。
ここでもアベンジャーズのファンがいたのは、ちょっと驚いたな。
〈…聞こえますか？…聞こえますか？今、主殿、貴方の心に直接語りかけています〉
〈こいつ、脳内に直接!?で、どうしたインフェルノ？問題発生か？〉
〈いえ。こちらでは再びテロが起きる可能性は低いかと。ジャーヴィス殿達の協力の元、職員の生存者を調べましたが全員シロと考えてよろしいかと〉
〈そうか。となると、やはり犯人は死亡者の中か〉
〈その可能性が高いかと。現在、メカクノイチと共に死体、あるいは体の一部が見つかっていない職員を識別中です。生存者よ比べ、死亡者の方が多いので少々お時間を頂きます〉
〈頼む。損な役割にして申し訳ない〉
〈お気になさらず。私達はチームで、仲間で、家族です。お互いに頼り

頼られるものですよ〉
　こちらの念話が終わったのと良いタイミングで向こうも終わったらしく、所長が若干涙目になりながらもこちらをキッと睨んでくる。
「アベンジャーズがどんな集団か、よく分かりました。非常に不本意ですが、今回は非常事態につき特別に自警団の活動で慣れているだろう貴方に、指揮権を譲渡します！ありがたく思いなさい!!」

　おう、このお嬢さん、どんだけ世間知らずなんだか。
　まあ、カマータージやサンクタムを知らない典型的な魔術師だな。
「承知しました。このホークアイ、謹んでお受けさせていただきます」
「フン！分かればいいのよ、分かれば」
　そっぽを向く所長だが、さっきから僕の家族達から殺気を送られているのは気付いているのだろうか。
　世の中、知らない方が幸せなこともあるから黙っておくか。今の所長の、状態についてもね。
「主。ご報告が」
「ピィッ!!だ、誰よコイツ!?」
「仲間ですよ。コードネームは、パライソだ」
「真名を、望月千代女と申しまする。主にお仕えする、しがない忍びでござる」
　突如、姿を現したパライソことチヨメに対して、再び所長が驚いて頭のネジが外れたのか元のポンコツに戻ってしまった。
「で、報告は？」
「ハッ。どうやら、この地に於いても聖杯戦争が行われていたようでござる。そして、いつの間にかマスターだけでなく一般人も姿が消え、サーヴァントだけが残った状態になったようでござる」
「その通りだ。それで、生き残ったサーヴァント達は再び聖杯戦争を始めたんだ。んで、俺はキャスター。真名はクー・フーリン。手を貸すぜ？」
　パライソの背後から出てきたのは、杖を持った蒼髪の男性であった。

先程、相対したランサーとは違い邪な魔力は感じない。
「彼は？」
信用出来るのか、とパライソに目で問う。
〈少なくとも、嘘は言ってないでござる。拙者がアーチャーと思わしきサーヴァントと交戦している時も、実力を測るかのように観察していたので、今のところ敵ではないかと〉
パライソの念話と、今の様子から確かに敵ではなさそうだ。
「分かった。こちらと手を組んで欲しい。僕はカドック・バートン。アベンジャーズだ」
「了解。よろしく、マスター」
キャスターから差し出された手を握り、魔力のパスが通ったことを確認する。
まずは情報の共有。その後は、反撃と行こうか。

第三話「アッセンブル」

前回までのあらすじィ!!
アベンジャーズに所属するコードネーム・ホークアイこと、カドック・バートンは、国連より謎の組織、人理継続保障機関カルデアの内部調査を依頼される。
そこは、科学と魔術が交差したタイムマシンも開発しちゃったトンデモ組織だった!
いよいよファーストミッションという時に、何者かによって爆破テロられてしまう!
しかぁーし、魔境ＪＡＰＡＮで数々の死線を経験して鍛え抜かれたカドックくんは、何とかピンチを潜り抜ける。
だが、そこでさらなる試練が!?
何と、タイムトラベルのオート機能がＯＮの状態だった為、カドックくんを無理矢理タイムトラベってしまったのだ!
そして、歴史が改変された原因となった時代に飛ばされたカドックくんは、現地の生存者にして情報提供者と会うことが出来た。
さあ、これからカドックくんを酷い目に合わせた、元凶への反撃を開始だぁ!!
「ーーー的な?どうよ、ジャーヴィス?」
『ですから、報告書は面白く書くものではございません』
「チェッ。まあ、切り替えよう。確認だか、マスターが居なくなった後、セイバーのサーヴァントがキャスター以外を討伐。で、倒されたサーヴァントは復活してセイバーの言いなりだと」
「それだけじゃない。もう一度倒しても、時間が経てばまた復活するぜ」
「まるで、ヒドラのようでござる。であれば、アサシンとライダーをキャスター殿が、ランサーを主殿が、アーチャーを拙者が討った今が、最も消耗が少なくセイバーに近づける好機かと」
「ヒドラは、コールソンさん達が倒しただろ。ふむ。ジャービス、バーサーカーの位置は?」

『依然として、郊外の森林より動いていません。クー・フリン様の言葉通り、此方から手を出さない限り無害なのでしょう』
「であれば、行くか」
「行こうぜ」
「御供致しまする」
　そういうことになった。
　ちなみに、所長は付いて行くと聞かなかったので、パンサースーツのヘルメットだけ被せてある。
　正直、スーツも着させて最低限の防護をさせたいが、生憎と自分が真っ裸になってしまうので却下だ。
　キャスターの話に寄ると、この特異点のボスたるセイバーはこの地で行われていた聖杯戦争の大元である大聖杯がある山の中の洞窟に居座っているそうだ。
「それはそうと、アーチャーってどんな奴だった？」
「そ、そうよ！それに、ただの人間がどうやってサーヴァントを倒したのよ!?」
　まだいた所長が、ヒステリックに叫びながら詰め寄って来る。
　今更だけど、よくこんな性格で所長になれたな。あ、親のコネか。
「拙者は忍び故、気配を自然に溶け込ませて背後から首筋をザクッとして、霊核にドスッとしてミッションコンプリートでござるよ」
「まあ、この嬢ちゃんが暗殺する直前まで、野郎は俺に気を取られていたってのもあるけどな」
　何でもアーチャーとこのキャスターは、浅からぬ因縁があったらしい。
　悪いことをしたかな、と思ったが、平時の聖杯戦争ならいざ知らず、現状の聖杯戦争では決着を着けても面白くなかったそうなので、問題ないと太っ腹な許しを頂いた。
「それで、セイバーはどんな英霊なんだ？クラス名の通り、剣の扱いに長けた英雄なのは想像が付くけど」
　少なくとも、強敵に違いないだろう。何せ、単騎でアサシンやライダーを討伐できるキャスターが助力を求める程だ。

「ああ。奴が使う剣は、聖剣だ。名前は、エクスカリバー。ここまで言や、分かるよな？」
『エクスカリバーだって!?そんな!?あのアーサー王が、敵だって言うのかい!?』
「そんな嘘よ！最優のセイバーが相手なら、キャスターとアサシンもどきに、生身の人間なんて勝ち目がないじゃない!!」
皆が絶望するところ悪いが、ステータスの高さが確かに強さの内だろうが結局は相性や運によってもジャイアントキリングは可能だ。
というわけで、だ。
「ジャーヴィス、皆に連絡を」
『内容は？』
「アベンジャーズ、アッセンブルだ」
『承知致しました』
ジャーヴィスとの通信を切ると、チヨメは何を行うのか察してこちらを見て頷くと周囲の警戒に入った。
左手を握り、地面に打ち付けると火花を散らしながら魔法陣が広がる。
それをキャスターは面白そうに見守り、所長は何が起きたのか分からずオロオロしている。
「令呪（セット・オーダー）、起動。来い、インフェルノ、ＫＥＮＧＯ、オートマタ、魔眼、マジン!!」
ガントレットの窪みに刻まれた紅い紋様の六つの内五つが輝くと、魔法陣の中に五つの人影が浮かび上がる。
「「「「「御意」」」」」
「戦働きの為、参りました」「新免武蔵、ここに見参！」「ここに起動。入力を求めます、マスター」「私に出来ることは、精一杯お役に立ちます」「この身が砕け散るその時まで、共に戦おう」
「行くぞ、人理を焼却した悪党にアベンジだ」